

人間中心の観点での 東日本大震災からの創造的復興

小特集編集にあたって

編集チームリーダー 苗村昌秀

本会の会誌では、2012年3月号で「東日本大震災からの復興の取組みと震災から得た教訓」というタイトルで特集を組んだが、その特集では、主に、情報通信技術の観点から見た復興の取組みと教訓に焦点を当てた構成となっていた。そこで、本小特集では、震災が人間生活にどのような影響をもたらしたか、普段どおりの人間生活に回復するために情報技術も含めた社会全体が取り組むべき課題は何か、及び、今後の災害に備えてどのような準備をすべきかなどの人間中心の観点から震災に係る記事をまとめることにした。記事の中では、実際の被災した方々からの生の声を集約整理し、今までの普通の人間生活を取り戻すための復興のための取組みなど、現地に密着した形での報告も紹介している。そのため、技術的な解説記事の体裁にこだわらず、震災当時及び復興の過程で実際に目で見、耳で聞いたことを現場の復興に携わっている執筆者の方々にそれぞれの立場からの視点で率直に語ってもらっている。

第1章では、大震災に際しての人と人のコミュニケーションの本来あるべき姿とコミュニケーション技術のギャップを基に、今後の技術の進むべき方向について考察して頂く。

第2章では、心理学的な観点から、東日本大震災のときの災害情報がその後の避難行動にどのような影響を与えたかを分析して頂き、今後の災害時の情報伝達方法のあり方について提言して頂く。

第3章では、現役の医師である執筆者に東日本大震災当時の医師の行動を実際の事例に基づきつまびらかに紹介して頂き、非常時の行動での情報伝達手段としてマニュアルに捕われない自律的な行動の重要性について解説して頂く。

第4章では、東日本大震災で大きな役割を果たしたボ

ランティア活動について、実際のボランティア活動に関わってきた執筆者にボランティア活動の実態とそこでの情報流通の重要性について語って頂く。

第5章では、震災後の復興過程において実施された被災地の高校生支援活動の紹介を行い、復興において人と人の絆がいかに重要であるかについて論じて頂く。

第6章では、いわゆる情報弱者の立場から災害情報の流通に求められるものとはどのようなものであるかを整理し、今後の震災情報流通システムのあり方について述べてもらう。

第7章では、産官学が連携して東日本大震災に関するあらゆる記憶、記録、事例、知見を収集するプロジェクト「みちのく震録伝」についての活動を紹介してもらう。

第8章では、本小特集全体のまとめの位置付けとして東北地方での復興に向けた様々な活動を紹介して頂き、災害に強い科学技術と人間の営みとのあるべき関係について提言して頂く。

大震災の提起した課題は大きく、本小特集でカバーできることはごく一部であり、英知を集めるスタートでありゴールでない。専門家の力による、より広く深い分析と、改善・解決への努力が未来世代に伝えられ、受け継ぎ蓄積された力によって創造的な東北復興、更には日本再生へとつながることを期待したい。

最後に、今回の小特集記事では、必要に応じて顔合わせでの打合せを行い、関係者の方々には通常以上の負担をおかけしたのではないかと危惧するところである。ただし、そのような打合せの効果もあり、少し型破り的な構成ではあるが、読者の皆さんに伝えたいと想定していたことを十分伝えることができたのではないかと、思う。これも一重に震災の経験を広く有意義に伝えたいと真摯に願う執筆者の皆様方、及び精力的に執筆者間の調整をして頂いたゲストエディターの小粥氏をはじめとする編集チームメンバーの皆様、学会事務局の皆様の御協力あつての賜物である。ここに深く謝意を表する。

小特集編集チーム	苗村 昌秀	小粥 幹夫	持田 侑宏	植野 研	蘇 洲
	辻 弘美	永岡 隆	服部 元	藤木 淳	牟田 英正